

五十二回 夕刊

發行所 合資 京城日報社

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

發行所 合資 京城日報社

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

發行所 合資 京城日報社

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

發行所 合資 京城日報社

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

發行所 合資 京城日報社

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

發行所 合資 京城日報社

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

電話 四六二六

電報掛號 四六二六

郵政掛號 四六二六

は必ず又其の搬込みが市場に及ぼす影響如何と云ふに内地に於ては無論問題にならず然らば朝鮮は如何と云ふに鮮銀の紙幣が金體より見れば花樣多き特株は約二萬八千六百株なれど中

▲三萬株 は總督府の特株にて

●新米の走り
湖南産金提より廿四日本年新穀一袋
釜山本町五島合名會社へ送附し來り
たるより直に釜山穀物市場へ送りし
に百斤七圓零にて現立新町並洋行
へ御藏書商内を爲したるが朝紙に於
ける本年新米の初荷なりと(釜山)

満鐵當事者の案内にて旋
 長春、奉天、遼陽、本溪湖等諸鐵
 道に於ける上各設備其他の一概
 を視察の上各自解任の機定なる
 回は研究事項多きを以て各参観者
 社

一一回滿九月二十七日六連入港の
 船にて來著すべく會終了後は都
 及び

分

大坂主幹出張 大坂亦本幹出張
 御案の於二十七日より有難き地方
 に出張。御氏は二十六日午前八時三十分
 大坂大門警務所にて退京の客なり
 井内鮮魚局長臨京。母堂逝去のた
 り上中なりし鮮魚調査局長井内
 氏は二十五日午後九時南大門警務
 所に歸任し

賤終了。去る廿二日より忠清南
 に於て開議中の各郡主守等爲主
 議は決定の如く廿五日を以て
 すべし尙會廳に於て面制に備
 紙より海田縣に於て議の終々
 郡令により中止し大原等密府
 馬蹄嶺に廿六日大州出發馬兵院
 仕の營△中野より赴任。今回

諸に關する事項と共に新たに設置
 れたる地方局救護課に移管された
 のに木浦に赴くべし（釜山）

東に勤務したる米人レミス、エス、
パーレン氏の如きは滿洲の農業に就

は蓋し向き支店の増加を計るためと云ふ如き特種事情より來りしものに

都督府民政部の古参なれば身體健康ならんか當然白仁氏の後を襲ふ

等が密集的生活をなして其の界限

以て奇利を占めんと願ぎ居るもの哉

家の膳所は築してと聞きたる所
加ふちの要あり
けれ

石

整
過
良
好

寺並浪花橋を南へ入つた東側に田
合の地所ぐるみの家が見付かへ

憲兵密漁支那
 人と格闘す
 安南沿海地方に支那密漁船出
 現侯は其の後の經過頗る良好な
 (東京特電)

朝鮮の佛畫家 (下)

●金石翁を助ふ

釋王寺創建の緣起

秦阿星

鮮人の王上 釋王寺復興記 (六)

乗せ、去二十日、定州縣、船來、方面に
風浪を冒して、百方搜索、中同島を
一千米突の渾合に一變の怪しき
船、泊し居るを認め、取調べると
く、支那、漁者五名、乘組み居るに
ち、捕縛をかけ、小舟に乗せて、
指して、護送中、五名の、中四名は、

處たに解らない。方々へ探して歩
 れるうちに、ある山の峯まで来る
 日はトツブリと暮れて了つて、前
 踏して見ると、絶壁になつて下に
 谷が流れる。さては困つたものな
 色々思案をされてゐるどころへ、
 か向よから驟に燈火の光りが、幽か
 見つたそうです。それでこの寺の

隙を窺ひ捕縛を咬み切りて逃走
したれば金澤上等兵は夫れと心合
艦夫を指揮して取押へんとする
名は頑強なる抵抗をなし爰に小
中にて激しき争闘開かれ犯人は
揮つて同上等兵に打つて蒐りた
上等兵は止むなく發砲したるが
開争に上等兵は前額部其他に重

三祖はその光りを目當てに降りて往て見ると、果せるかな、老婆が云た通りに土窟があつて、その土窟には異僧が坐つてゐたそうです。太祖はその僧に「叮家、御拜をて御自分の不思議な夢物語をしてその旨を聞く」と僧は笑を致した。

負ひ船夫二名犯人四名は海中に生死不明にて一名のみは辛うじて得たる旨急報に接したる畑原分隊長は廿二老江鎮に急行せし

讀者文藝（一冊に五十回分）

▼下句付「氣の付かれ」

氣の付ぬ小みちを行くが才子な
(C)等 京城智閑 あさひ

▲一 處に正金をかけ京城志ける

同、大出、登

▲「自己の娯所を聞いて見る」

▲「装ひして通ず」
原城 京城 雲海 利城
月

はない、弟家の養娼は、コキイと
つて高貴の位を祝する事であり、
家の娼嬢はオグンタンといつ
御日常を執する娼である（オグン
タンといふのは朝鮮語で娼の姿を形

したもので、御園當も同じく尊御
 言ではオクタンである。花が落
 たら實があるべく、鏡が落ちて
 うして聲がなからうか、又三條を
 上たといふのは、すなはち王の字
 ある。落花落鏡も亦王原を促す夢
 ある。三條の御顔を見てゐるが
 ジョツと太祖の御顔を見てゐるが
 公の蕭園吉王の相があらはれ、今日

船船上陸客二十四日午
船名入港船名一二三等客
十五名天須賀德太郎宮崎安良松本正
輔介安井時太郎西里備田九一郎
船名入港船名一二三等客

事は憤んで之を口外にはならぬ
をしてこの地に一刹を建て名付
て釋王寺と云た方が最も好からう

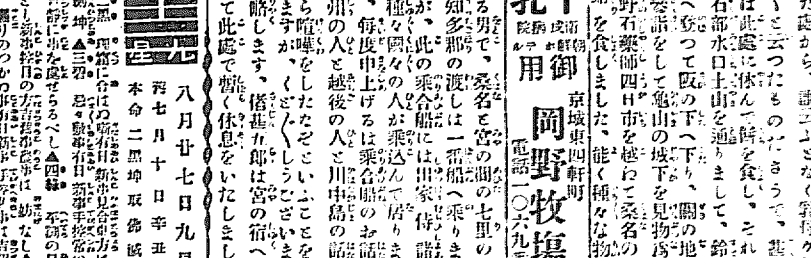
(一)等八名庭内所出 知中源治郎 南田政次郎
永田久 庭内所出 成田平次郎 藤田 佛國
人名
二等十五名 南田所出 阿蘇山島要吉 南田
西田平次郎 大南吉成入 佐藤清太郎 富
子 柳川清太郎 山田所出 佐々木 佐藤清太郎
阿部 山田所出 山田所出 山田所出

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

第八席

海道筋を江戸へ下らうといふ、
も急ぐ道中ではない故神社佛閣

釋して盛大な建物を得得の爲
 行うといふ考へ、石山の觀音
 詣いたし名代の近江入景を見
 戸の披露を定つて草蓆を敷
 泰徳殿中の慶九月一日より稽古
 始仕候
 盛花家元 春道齋
 (京城別治町)
 のがございます。是は乳母ヶ餅と
 京太義隆の家、潰れて乳母
 を作り、故郷の草津へ歸つて來
 の乳母ヶ餅を齎つて若君を養ひ



内
腸
病
科

定時九夜察診

京
城

日にも
美

大清
光緒
庚子
金幣

發賣元

京坡士

攝

[illegible]

シノリ色白く

本館平尾黃

米格デグ君の得意 全二巻 櫻荘風説

富嶺の八月四日より 運轉路四八號 林三郎殿

早川 萬葉集 第五卷 五七五番

活動寫眞館 第五卷 五七五番

浪花館

電話 治町

大觀 二平 浪花館

今更 夢 浪花館

平 浪花館

入場料は 破天 平 浪花館

金五錢均一

東京 小林 浪花館

早川 萬葉集 第五卷 五七五番

活動寫眞館 第五卷 五七五番

有樂館

電話 治町

大觀 二平 有樂館

今更 夢 有樂館

平 有樂館

入場料は 破天 平 有樂館

金五錢均一

糸顏イトガハを自然しぜんに
夫そくしくする

て、氣持をよくする上に、
ノリ色を白く致します。
焦を防ぎますから、素化
で入ります。

[illegible]

でも
べじのする
う

衛生上の効果の外、
も好かれる優雅な香
持つてをります。

女流浪華の花形前田八重子一行
 武士の意氣風流新田若者
 樗牛新笑家「新小説館」一筋の探偵小説
 三國一醫者の問答専門「秘伝義士」
 忠孝三傑の問答奇譚。密坂監製
 三階、兩階、一階

京橋五七町 壽座
 小三の生立り小三が金五郎に誘立より
 小三の女立り小三が金五郎に誘立より
 小三の生立り小三が金五郎に誘立より
 小三の女立り小三が金五郎に誘立より

京橋長谷川町七九(電話七三番)
 内外科

な病氣の流行る夏に
ライオン齒磨を使
生を遺憾なく實行な
上にはお口の清潔が一
で御座います。

是非此
て朝夕
いませ
効果の

持
花柳病科
小兒科
肛門病診療
中
上每日午
中に限

石印
本館
小林
大郎
(21)





Days since start of study (X)	Days since last rainfall (Y)
0	0
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10

